

ペチュニア・アルチプレーナ

(*Petunia alti plana* T. Ando et Hashim. 1993)

千葉大学園芸学部 安藤敏夫

南アメリカ大陸の温帯から亜熱帯にペチュニア属は分布する。亜熱帯では生息地が高地に限られるし、分布の最南端は南緯39°00′、日本なら岩手県平泉に相当するから、ペチュニア属は温帯性と言うのが正確だろう。ならば、どうしてスタンダード型(非カスケード型)の種子系ペチュニア品種は寒さに弱いのだろうか。

多くの現代花卉は育種の歴史を200年前にさかのぼれる。ペチュニアの場合、1830年代のイギリスにそれは始まる。大航海時代の末期、当然まだ帆船の時代である。当時のプラントハンターが近づけたのは、天然の良港か、その時代に既に発達していた原住民の街だけであつたらう。そしてそこは将来、大都市に発展することが約束された場所でもある。だからその時代にルーツを辿れる花卉はどれも、その親が現代の大都市で採集されている、という不思議な歴史をもつのである。

ペチュニア品種は、アキシラリス(*P. axillaris* = *P. nyctaginiflora*)とインテグリフォリア(*P. integrifolia* = *P. violacea*)の雑種起源と記録されている。両親はどちらもウルグアイという小国、あるいはその周囲のアルゼンチン領かブラジル領で採集されたことは間違いない。ウルグアイの首都=モンテヴィデオは南緯35°で静岡と同じ緯度である。だがそこは沖に寒流が流れる常春の国、リンゴ園とレモン園が共存する半乾燥の大地である。だから、日本の夏にも冬にもペチュニアが弱く、梅雨時に傷んでしまうのも無理はない。

だがペチュニア属の分布はウルグアイだけではない。写真はブラジルのサンタ・カタリーナ州東部と、リオ・グランデ・ド・スール州北東部の標高600m以上(特に1000m以上)の熔岩台地上に生息するアルチプレーナである。ブラジルとはいえ、そこは雪も降る激しい気候の土地である。こうした土地では寒さにも暑さにも強くなければ生き残れない。

1種を除き、ペチュニア属はみな多年草である。もっとも栄養繁殖器官をもたないのでせいぜい2~3年の寿命だから、短命な宿根草と表現できよう。ところ



ペチュニア・アルチプレーナ

がこのアルチプレーナは例外で、地表を匍匐する茎から不定根を生じ、また次々と側枝を生じて地表を覆い尽くすような巨大なマット状に広がる完全な多年草である。種子から生じた最初の根はゴボウ根となって年々肥大し、太さ10mmを越えることもある。新しく拓かれた道の斜面にはたいがい生えている。石の多い痩せた陽地、伐採されたストロブ松の植林地などにも好んで生える。直径2m程度の株は普通で、直径5mに達する巨大な一株を見たこともある。斜面に生じた株の枝は必ず下垂している。枝は細くしなやかなので、他の種のように簡単に折れることはない。だが、その場所にイネ科植物がはびこってくるようになると、次第に消えて行ってしまう。森林性の種を除くと、ペチュニア属の種は基本的にこうしたパイオニア植物と思われる。

私とブラジルに帰化した植物学者=橋本悟郎は、ブラジルからペチュニア属の7新種を発見して記載している(それにアルゼンチン・ポリヴィアから1亜種)。ペチュニア属からカリブラコア属が切り離された結果、たった15種の小属になってしまったペチュニア属の半数近くの種を記載する幸運に私たちは恵まれたのである。正直なところ、この有名属にまだ新種が眠っていたということ自体が驚きである。日本の園芸家としてこの種を記載したことを誇りに思う。それ故、墓場までもって行かねばならない事実も少なくない。